

宮崎県立看護大学大学院看護学研究科 令和3年度修士論文要旨

喉頭全摘出術を受ける頭頸部がん患者の生活再構築過程の様相

～ 術前から在宅移行期に焦点をあてて ～

木下 雅恵 (基礎看護学)

【キーワード】 生活再構築 過程 様相 頭頸部がん 喉頭全摘出術

本研究の目的は、喉頭全摘出術を受けた頭頸部がん患者の、術前から在宅移行期までの生活再構築過程の様相を明らかにすることである。研究対象者は、喉頭全摘出術を受ける頭頸部がん患者で、がんの病名告知と病状説明を受け、主治医の了承と研究協力の同意が得られた患者3名を分析対象とした。

研究方法は、病棟看護師として対象者への看護を実施し、〈術前オリエンテーション時の大事にしてきた生活習慣や、術後の生活における戸惑いや願い〉と〈術直後から退院日までの日々の身体機能の回復状態とそこに繋がる患者の表現や支援者の関わり〉を、受け持ち時は患者の表現や関わりの詳細とそれ以外は看護記録、診療記録より情報を得た。〈外来受診時の半構造化面接から、生活の実態・工夫・困りごと〉をフィールドノートに記述した。それを基に、時の流れに沿い〈身体機能の回復状態〉〈身体機能の回復状態に調整を図る表現〉〈医療者の認識と関わり、家族の関わり〉のまとめり毎に生活の再構築という観点から研究資料を作成し、回復の経過に沿ってキーワード、キーセンテンスを記載するフォーマットを作成し研究素材を作成した。それを基に生活の再構築という観点から特徴を分析、

抽出した。さらに、全対象者の生活再構築過程の特徴から共通性・相異性を検討し、喉頭全摘出患者の生活再構築過程の様相を抽出した結果、以下の6点が明らかになった。

1. 喉頭全摘出術患者の生活の再構築は、術前から始まっており在宅移行期にも継続していた。
2. 患者は回復の経過に関わらずどの時期においても、病気を治し術前の生活を取り戻す願いを動機に、回復の段階により変化する困難感に対して、医療者・家族から支援を得て心身を調整し対処しようとしていた。
3. 患者は、術後すぐから様々な手段を使って思いを伝えようとし、排泄をきっかけに離床を図ると、自分の感覚を基に回復の状況や活動範囲を見定めながら、呼吸、食、運動、さらに清潔、整容、社会活動へとADLを拡大させていた。
4. 患者の術前の生活を取り戻す願いは、術後【食べる事を取り戻したい】、【口から食べる喜びを取り戻したい】と食への思いを強めつつ、生活を取り戻す願いが高まっていた。
5. 患者は、ADLの拡大に伴い困難感が生じるが、以前の生活での楽しみを想起したり今後の楽しみを想像すること、家族・医療者からのサポートに支えられていると感じ取ることによって生活再構築が促進されていた。さらに、これまでの生活や術後の訓練で培ってきたことが自分の強みになっていると実感できると、自身の生活を取り戻したい願いが高まり生活の再構

築が促進されていた。

6. 家族の支援は手術を受けると決めた時から始まっており、途絶えることなく在宅移行期においても継続していた。

以上より看護者は、一日一日が生活再構築の過程にあると患者自身が実感できるよう、変化する状況の意味がイメージでき、回復の段階が描け、患者自ら回復に必要な状態を作り出せるよう支援する。あらゆる五感から得られた感覚が回復過程であると実感できるよう、どのような状況でもありたい姿と自身の持つ支える力に気づくことで生活再構築を辿れるよう支援する。